

## 教養と発明

### —— 教父時代の哲学と神学 ——

今道友信

この論考の主題は、もともと第20回中世哲学会に於ける、神学と哲学の関係に関するシンポジウムに際し九州大学教授（当時南山大学教授）稲垣良典氏が中世に就いて、また聖心女子大学教授エリザベート・ゲスマン夫人が主としてフランシスコ会の伝統に力点を置きつゝ哲学及び神学の概念の史的変遷を問題としたのに並んで、教父時代に関する問題を私が担当して提題者の一人となつた時に提出した問題である。由来、私の思ふところでは、体系は歴史を形成するものであるがゆゑに、それは決して歴史以前にとどまるものではなく、歴史を通じて超歴史的領域に歩み出る営みである。従つて、歴史研究は単なる過去の再現ではなく、過去に於ける有意味的契機の発見であらねばならない。すなはちそれは過去に於ける意味群の結晶体であるところのテキストを通じてしかなされ得ないことである。それゆゑ、徒らにテキストから隔たるとはテキストの研究を終へた後でない限りは非歴史化の象徴である。すなはちそれは歴史以前への退化に他ならない。それゆゑ、一般的な課題としての「哲学と神学の関係」に就いて教父時代に於けるその問題の歴史的状況を再現するにとどまらず、その有意味的契機を発見し、「教養と発明」といふ体系的解答を企てるに際しても、漠然と教父時代を達観するだけの資料的準備がないから、範囲を限らうと思ふ。すなはち、ギリシア教父からニュッサのグレーゴリウス、ラテン教父からアウグスティヌスを取り上げ、教父の二大系列に於ける典型的思索家の原典解釈を介して、その時代に提起せられた問題の中で現在も意義深い構造を持つものを選び出し、課題を非歴史的にはなく、歴史的

にとどまることもなく、これを越えて超歴史的な方向に迄塑造させてみたい。

## 1. 哲学の理想

ニュッサのグレーゴリウスに至つて完成を見たと思はれるものはプラトニズムとキリスト教との人間教育に於ける融合である。それはすなはちパイデアといふ古典的理念として完成をみた哲学的教育観と救済といふ宗教的理念に由来する神学的教育観の最初の見事な一致であり、次の世界に展開をみる修道院的教育の理想やキリスト教的ヒューマニズムの結晶への過程の最初の踏み出しとして、ギリシア人のポリス、ローマ人のインペリウム、ヘレニズム時代のユダヤ人のポリテウマの自らなる統合、完成を暗示するものであつた。

しかし、哲学はパイデアを果たしてそれ程までも理想とするであらうか。哲学の関心事は「自己自身の発見」「正確なる定義」「価値の定立」「存在の解明」「真理探求」であり、それらはいづれもプラトーンやアリストテレス、プロティノス等の文献に頻出する術語であり、しかもいづれもパイデアとは深い関係が直接的にはなささうに思はれる。そこで我々としては、哲学的営みの目的が果たして何であるかを知らなければならぬ。少なくとも正統的なプラトン哲学に於いて何と考へられていたかを極く手短かに反省してみなければなるまい。周知のようにプラトーンは自己の哲学の理想像として、自らの師であるところのソクラテースをして語らしめるところから著作活動に入つたのであるが、その対話の課題は概ね成人の理解追究すべき道徳的価値（正義・徳・節制・勇気など）であり、決して直接に教養としてのパイデアがその中で高い位置を占めてはゐないと考へる人もゐよう。しかし「国家篇」のやうに、また、「法律」でもさうであるやうに、プラトーンには青少年の理想的教育を最大の関心事とみなしてゐる書物もあるし、何よりも自らアカデメイアといふ学園を経営して幾多の俊才を各界に送つてゐた。これをみてもプラトーンの哲学

が外面的にもパイディアと関わりをもつことは明らかであり、事実を精細に調べればソークラテースは円熟した徳の保持者として現はれはするが、対話の多くは、如何にして真実の生活に達する可能性があるかといふ、ソークラテースの言論と行為による青年に対する教育なのである。プラトーンに於ける教育の重視は、実は人間の哲学的完成としての「神との一致」(ὁμοίωσις θεῶν κατὰ τὸ δύνατον)<sup>(1)</sup>を目指すがゆゑであり、その意味では、プラトーンの哲学の理想は彼自らが書く通りに「神の一族となること」(εἰς θεῶν γένος ἀφικνέσθαι)<sup>(2)</sup>に他ならないが、これこそ人間を教育して神に親しき者とすることであり、この考えをキリスト教的に継承したニュッサのグレーゴリウスでは、「神の友となること」(τὸ φίλον γένεσθαι θεῶν)<sup>(3)</sup>という言葉が明らかに示すやうに、彼に於ける「神との一致」(ὁμοίωσις θεῶν κατὰ τὸ δύνατον)<sup>(4)</sup>では神とは類を異にしつつもそれと友になることが人間の目的であった。すなはちプラトニズムに於いては極端に言へば人間神化が語られるが、グレーゴリウスの場合、神との一致は直ちに神化ではなく、友たることにおける神と人との一致であり、かかる一致の保証として恩寵であるところの神顯(θεοφανία)による導きが必要であった。かうして神及びその予言者を教師としてその教示の下に果たすべきパイディアの体系が新たに意識せられることになる。このことに関して我々が注目しておかなければならない記事が創世記第三章にある。蛇にそそのかされて智慧の木の実を食したアダムとエヴァは、その裸体を恥ぢて無花果樹の葉を綴つて裳を作つたが、神に咎められいよいよ樂園を追はれることとなつた。その時エホヴァは、二人を樂園から追い出すに際して今迄の祝福とは異なつて、彼ら二人の将来の悲惨を予言し「汝は面に汗して食物を喰らひ、終に土に帰らん。その中より汝は取られたればなり、汝は塵なれば塵に帰るべきなり」<sup>(5)</sup>と言ひつつ「アダムとその妻の為に皮衣を作りて彼らに衣せ給へり」<sup>(6)</sup>と言ふ不思議な優しさを示してゐる。この神の与えた皮衣については、古来いろいろな註釈家が説を立ててゐるが、ヴァレンティヌスの考へでは、人間の肉体が、人間の真の本性とは既にして異な

つて<sup>あかし</sup>いる証であるとみてゐる。オリゲネースは象徴的解釈を通じて復活する筈の<sup>(7)</sup>エーテル的肉体と地上の肉体とを対立させてゐる。ニュッサのグレーゴリウスは多くの点で最初の頃はかかるオリゲネースの解釈に啓発されるのであるが、やがて殆んど全ての分野に於いてこの先輩を凌いで別様の独自の解釈を打ち立てて行くやうに、この問題に関しても又さうである。グレーゴリウスは、人間の原初的な姿は神の肖像である筈なのに、今やアダムは死すべきものの皮衣によつてまとはされている。これは、神の像が今や肉の醜さによってかくされていることに他ならない。それゆゑ、神の像としての人間は、悲惨な地上を離れて行かねばならない。何故かと言へば人間が罪の後追放された場所がこの地上だからである。従つて、この後、肉の衣を脱ぎ捨てて皮の衣を、すなはち、肉的精神の衣を脱がなければならぬのである。

この問題は人間学の問題ではなく、改宗の問題である。しかしながら、その言つてゐる意味は明らかであると思はれる。これはプラトーンやプロティノスの哲学の目的が、精神を肉体から解放して霊として神の一族となることを哲学の理想としていたのに対し、グレーゴリウスは人間が自己を解放しなければならぬのは、肉体からではなく皮衣にふさはしい人間の動物的条件から精神を自由にするのであつた。従つて、プラトーンの哲学を継承してゐるとはいへ、グレーゴリウスの場合は、虚偽の認識がつきまとふところの認識論的悪たる肉体を捨てることが、知の主体としての精神によつて目的とされたのではなく、動物的な状態に墮ちた人間がその肉体を捨てるのではなしに、動物的な状態から解放されて皮衣を脱いだ元の人間の姿、すなはち肉体を持てるままの人の姿で神の友となるといふ違ひがある。ここに人間全体の実存的上昇としての教養の意味がある。それゆゑ、彼に於けるやうに、教父に関する限りは哲学的に理論化されてのキリスト教では、神学と哲学の区別はなく、無学に近かつたキリスト教が学的反省を加えられるにつれて神学的哲学が成立してきたのである。固有な意味での神学とは、教父時代に於いては神の自己啓示、すなはち、神頭の極

みとしてのキリストについての学説（キリスト論）のみではなからうか。このやうな傾向は、思弁的性格のギリシア教父に於いては、ニュッサのグレーゴリウスにその典型をみる如く、甚だ顕著であつて、例へば後代の神学者であれば、‘*imitatio Christi*’すなはち、キリストを模範として人生を形成するといふべきところを、預言者としてはモーゼを論ずることとキリストを論ずることとにあまり大きな差はないかの如くであり、モーゼを模倣することによつて人間の理想は達成されるといふ程である。キリストはただ、かかる自然的な営みを超自然的な域に迄高める保証的存在とみられると言ふも過言ではない。

その結果として、「哲学の営みは神との一致乃至同化である」とするプラトーン理念でもつて「自己の肖像として人間を創造した」といふユデオ・キリスト教的な神の創造論を基本とする人間観を解釈しつつ両者を結び合せて、アノー・カトーの統一を完成することができたのであらう。従つて、プラトニズムと旧約神学の接点といふところにグレーゴリウスの著るしい特色があり、神秘思想（ミュスタゴギア）といふ如き問題も出て来る次第である。しかし、これはあくまでも理性的思弁による論理的必然（アコルテイア）の探求なのであり、啓示といふ歴史的事実の現象的可能性を論理的に明示しやうといふ形式に於ける思索なのである。

## 2. テオロギアとテオロギケー

それゆゑ、ニュッサのグレーゴリウスの試みるところは、純粹に神に関する思弁であり、神に関する歴史ではない。その意味でここにはテオロギア <sup>(9)</sup> *theologia* はなく、テオロギケー <sup>(10)</sup> *theologikē* がある。といふことは何を意味するか。周知のやうにアリストテレースは単なる神に関する伝承乃至歴史的記述をテオロギアと称して学問の中には入れず、これに反し神的存在の論証に関する学問をエピステーメー・テオロギケー *epistēmē theologikē* すなはち、神学と呼んだが、グレーゴリウスの試みが神の歴史より歴史的イメージの断絶的連続を介して神の跡<sup>あと</sup>を論理的に辿るといふのである限り、彼の思弁はアリストテレースの伝統に従ふならば、確かに

テオロギケーとして第一哲学でなければならず、タ・メタ・タ・ピュシカ（形而上学）であらねばならず、当然の帰結として哲学も神学も区別される筈はない。およそ人間である限り、自己の知らなければならない道を、知性に恵まれた人ならばその恵みに対する責務として、また文化的恩恵に浴したならばその恩恵から生ずる社会的義務として、反省的に論証しなければならないが、さういう知識人の必須教養として旧約聖書とギリシア哲学、あるいは神学と哲学はひとつであり、ひとつのものとして全人類の道標となるパイディアである。

### 3. パイディア

ニュッサのグレーゴリウスに於いて、人間が成長する為に持たなければならない教養としてのパイディアは前述のやうに、具体的には旧約聖書とギリシア哲学であると言つてよい。しかし、それならば、その証拠はどこにあるか。いふ迄もなく彼が預言者モーゼを人間の理想として立てたことからして明らかである。周知のやうにモーゼは、神に呼ばれる迄、当時として最新の知識であつたエジプトの学問を身につけてゐたが、特にその管理社会に於ける法律的な知識を駆使して神の言葉を契約と命令として地上にとどめることに成功した。ニュッサのグレーゴリウスは自らこの人を模範とすることによつて、この命令と契約が、人間の内的な、自発的な探求を通じて、実は自己の願望であり決断であることを論証しやうとしたのであり、いはばモーゼが律法に具体化した神の言葉を哲学の中に概念化して理論づけたと言ふことができる。しかしそのことが可能であつた所以は、彼が模範としたモーゼすら、ある一つの人格の予表に過ぎなかつたと言ふことである。それは誰であるか。言ふ迄もなくキリストであるが、そのキリストのことをグレーゴリウスは他ならぬパイダゴゴス（教育者）と呼び、パイディアがそもそも何を誰のもとに学ぶものであるかを明らかにしてゐる。

周知のやうにニュッサのグレーゴリウスは基本的にはプラトニストであ

りながら、人間の行為に関する自由の問題については、アリストテレースのプロアイレンス説に影響を受け、悪の起源を人間の決断に置こうとしてゐる。

教師としてのキリストの教育内容は言ふ迄もなくその言行を記録した新約聖書にある。そして新約聖書の精神は、モーゼに於いて具体化された神の言葉の地上的形態としての律法を越えるものであつた。それは律法を否定するのであるか。キリストが神の子である以上自己を準備した律法を否定する筈がない。それならば、と言つて律法のままであるならば、モーゼとキリストとの間に教師としての点に於いては何ら差はないと言はねばなるまい。それでは何者かを更に掟として古き律法につけ加えるのであるか。もしさうであれば、キリストは単に新たなるモーゼに過ぎない。「われ<sup>おきて</sup>律法また預言者<sup>こぼ</sup>を毀つために来れりと思ふな。毀<sup>また</sup>たんとして来らず、反つて成就せん為なり。」<sup>(11)</sup>とキリスト自らが山上で明言したやうにキリストの教えは管理社会の生活規範として縮小せられてゐた神の言葉を人の心に映し<sup>うつ</sup>昇らせ、内心からの喜びとして強制を自発に変質させることであつた。例へば「汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。」<sup>(12)</sup>と説くところを見ても明らかなやうに、律法の成就とは神の言葉が人間の善の最低限を示すに過ぎなかつたのに対して、その最高形態を積極的に示すことであり、それは管理社会の体制の下で過失なしに生きる為の外的な手がかりを残しつつ、しかしそれにとどまらず、内的世界の善を示すことに他ならない。このことこそ、ニュッサのグレーゴリウスが志向した問題、すなはち、法律を哲学に高めること、事物を観念に高めることに他ならない。従つて、旧約神学とプラトニズムの接点にグレーゴリウスの著しい特色があると述べたことは歴史と論理、律法とイデア論、ポリテウマとポリスをキリストの人格の写しとしての哲学に止揚することに外ならない。ということは繰り返しになるが、神学と哲学のパイディアとして的一致を物語る。

#### 4. ギリシア教父の特色

グレーゴリウスの思想を中心としてみたギリシア教父の特色は次の三つ

の概念によつて示される。

(一), *ὁμοίωσις*。イソテースと同じではない。つまり、神と神の一族となるといふ風に神と己れを同格化するプラトンのホモイオーシスではなく、神と友となるといふ類縁的ホモイオーシスが自覚されてゐること。

(二), *ἀκολουθεία*。ペイタルキア（忍従）、アナンケー（強制）ではなく必然性の論理的認識の啓示的歴史の論理への還元、その意味では地上的現象の歴史的、物理的秩序を觀念の価値的秩序に変換して理解すること。

(三), *ἐρμηνεία*。イオンの靈感の芸術的伝達としてのプラトンのヘルメーネイアではなく、神の言葉を具現しているモーゼの如き範例を解説して内心に於いて神の言葉に回帰する為のヘルメーネイア。

この三概念を通じてギリシア教父に於けるバイディアは自然人から神への立ち帰り、神に対する人間の回帰であると言つてよい。

## 5. 方法的に析出された発明

上に述べられたやうな回帰乃至上昇の一つの道の理論的發展をもたらすものは何か。その方法論的反省の結果、更に独自の成果が達成せられるのは私のみる所ではラテン教父の白眉としてのアウグスティヌスに於いてである。意外に思ふ人が多いかとも思ふが、その方法論的自覚の最も明確に示されている書物は題名からみてそのやうなことの期待できさうもない所の『恩寵と自由意志について』といふ長文の24章に亘る書簡である。『Et sic disputasse, ut non magis ego, quam divina ipsa Scriptura vobiscum locuta sit eiridentissimis testimoniis veritatis (そしてまた、私の論じ方は、私が話すといふよりもむしろ、聖書自体が真理に関する最も明らかな証拠を示して、あなた方と話し合つた、といふやうな仕方であつたと思ひます)<sup>(13)</sup>』この短い文章に示されてゐる方法は甚だ意義深いものがある。それによると彼の思索の方法は、自らの意識の地平の上に普遍的具體者としての問題提起者、すなはち、問題を共通とする一般の人間と scriptura すなはち聖書に具体化せられてゐる神の言葉との対話が行なはれるやうにすることであつた。そしてここで注目すべきことは、三者すなはち、聖書も



平均的普遍人も自己も既に神によつて創られ与へられた存在者であるから、思索そのものには創造がないといふことである。しかし、それならば理性の課題としての思索には新しい創意に溢れた躍動は最早ないのであらうか。さうではない。如何に問ひ、如何に聖書の言葉の教示を組み立てて行くのか、すなはち、自己の意識の中で、つまり独自の文化的背景及び人間的体験を持つ自己の意識の中で、普遍的人間の理性の疑ひに満ちた問ひと、真理の断片として予在する聖句を弁証法的に対話せしめるといふ言語の次元に於ける真理の言語的組み立てを如何に構築するかといふ発明 (inventio) に人間の理性の独創的営みがある。創造 (creatio) からも製造 (productio) からも区別される発明 (inventio) の意義は甚だ大きい。これについてはその方法的価値に関して『De doctrina Christiana』といふ著作に於いて論ぜられる所も多いが、今我々はこの言語的次元に於ける真理の発明に関しての、方法的自覚が最も明瞭に現はれてゐる『恩寵と自由意志について』から具体的な問題を抽出して考察を深めてみたい。

例へば、誰かが問ふて、聖書には「汝らは恩恵<sup>めぐみ</sup>により、信仰によりて救はれたり、是<sup>これ</sup>おのれに由<sup>よ</sup>るにあらず、神の賜物<sup>たまひ</sup>なり。行為<sup>おこなひ</sup>に由<sup>よ</sup>るにあらず、これ<sup>(14)</sup>誇る者なからん為なり。」とあると言つて「信者にとつては善行は必要ではなく、ただ信仰だけで十分なのだ」と主張するならば、一方ではまた逆にそもそも「信仰と善行とは無関係であり、善をなしとげるには自分達の力だけで十分である」といふ意見も生じるかも知れないとすれば、一体そのやうな時に我々はどうすればよいのか。アウグスティヌスの先程の方法論的自覚によれば、このやうに聖句と人間的な疑問とを対話させつつ次第に言語的関連を辿つて考へを進めるといふのであるから、このアポリアに際してもまた予在する聖句に頼る外はない。アウグスティヌスはただちに「我々は神の作品にして神の予め備え給ひし善行に於いて歩むべく、キリストイエズスに於いて創造せられたるなり<sup>(15)</sup>」と附言するパウロの言葉を引いてゐるが、これによると神の御業<sup>みわざ</sup>である我々が神の御業

であるキリストを介して、神の御業である善行に向かふといふ動向が明らかになる。といふことは人間に於ける善とはそもそも何であるかといふことについて深い省察を強いるものである。善とはこれによれば神の御業から神の御業への神の御業であるものの飛躍である。この飛躍があるといふことは、また飛び越されなければならない空虚乃至亀裂の存在を意味する。従つて善の否定としての悪の存在に罪は由来するとみなければならぬ。『神国論』において悪魔をも利用する神といふ表現があることも、この事実を裏書きするものである。<sup>(16)</sup>

## 6. 哲学と新約神学

さて、前述の「我々は神の作品であつて、神が予め備え給ふた善行の為に、これにそひて歩むやうに、キリストイエズスに於いて創られたものだからである」といふ意味のエペソ書の言葉は「信仰が人の業わざによるのではない。かくて誰もかりそめにも誇ることができないうやうになつてゐる」といふ言葉に続いてゐる所から見れば一体如何なる意味連関が隠されてゐるのであらうか。アウグスティヌスは「人の業によるのではない。」といふことを説明して、「業わざとは人間である汝自身によつて汝に生じてくる所の汝の働きのことであるが、しかし、その汝の業はもともとそれが行われようとする主体として神が、汝を組み立て形作り創造した」(non ex operibus dictum, tanquam tuis ex te ipso tibi existentibus, sed tanquam his in quibus te Deus finxit, id est formavit et creavit.)<sup>(17)</sup>と言つて、業とはさういふものでなければならぬとしている。このゆゑにこそパウロは、我々は神の作品であつて善行の為にキリストイエズスに於いて創造せられたものである、と言ふのである、と続け、その次に極めて大事な次のような言葉を述べる。すなはち、non illa creatione qua homines facit sumus, sed ea de qua ille dicebat, qui utique jam homo erat, cor mundum crea in me, Deus (Psal. L. 12); et de qua dicit apostolus, si qua igitur in Christo nova creatura, vetera transierunt, ecce facta sunt nova. Omnia autem ex Deo. (II. Cor. v. 17, 18) ここでパウロの

言う創造とは、我々人間が創られたあの創造ではなく、兎も角も既に人間であつた所のものが、すなはち「神よ、わがうちに清き心を創り給へ」と<sup>(18)</sup>ダヴィテが唱つたあの創造のことである。これに関しては、また使徒も「それゆゑ、もしもキリストに於いて在る人がいれば、それは新しい被造物である。古いものは移り行き、みよ新しきものが造られてゐる。しかしそれらは、すべて神から出たことである。」<sup>(19)</sup>アウグスティヌスは続けて、我々は「善行の為にこそ組み立てられ形成せられ創造されてゐるが、その善行とは我々が準備したものではなく、我々がそれにおいて歩むやうにと神が予め備へ給ふたものに他ならない」と言ふ。

従つて、これで見ても分るやうにアウグスティヌスの体系に於いては、神と人との相互契約の発展史といふ旧約聖書の理性的理解といふ形で、人間の歴史を通じて旧約聖書に接点を求めた哲学、といふ形の神学は皆無ではないけれども、少なくとも新しい意図として、キリストを恩寵に於いて捕へ、新約聖書に接点を求めるといふ形の哲学としての神学が作られてゐる。それは恩寵としての信仰を新しい創造と見る創造論の拡大を介して内的な問ひに屈折せしめられ、存在論的には無である所の悪の道徳的実在を論証すると共に、新しい形の倫理神学が考へられている。それは、善き行為とは丁度神学的弁証論が方法論的に自覚された時に、神学的思索とは人間が言葉を創造するのではなく、与えられた聖書の語句の組み合わせの発明 (inventio) による問題解決であつたのと同様に、我々が所与存在たる我々自身と神の用意したキリストに於ける善行を状況の要求と共に組合せて行く事を発明 (inventio) することによりひとつの行為を実現し、亀裂としての無である所の悪を越えて行くことであつた。しかし、それは度々繰り返したやうに彼の哲学が常に新約神学との接点を求めるといふことに他ならず、それは純粹論理が、断片的集結といふ形ではあれ、個々の聖句といふ、結局は歴史的人格であるところのキリストといふ啓示の歴史性に従属する傾向を生み、論理に対する歴史の優位が成立する恐れもないわけではなかつた。しかし、アウグスティヌスに於いては、それがロゴ

スとエートスとの相剋に転嫁しないですむ限定があつた。それが失はれた時、事実としてのエートスは、事実としての啓示に神の攝理として収斂せしめられ、創造による所与としての人間の新しき創造によつて可能となるエートス超越としての *inventio* であるところの思索も行為も、それこそが神に接する道であることが忘れられ、哲学は哲学史になるであらうし、神学は啓示的情報の整理学に墮するであらう。今の世の姿はその意味では十三世紀にもあつたと思はれ、その点では教父の時代は新鮮である。

### 7. テオロギケーへの意向

このことは場合によつては、今日でも *theologia* と *theologikē* と改めて区別する必要があるといふ事実を暗示するものである。前述したやうに、神の系譜とか歴史とか物語を集録した史的情報の整理された大系を、アリストテレスは *theologia* と呼び、これを全くのところ学問（エピステーマー）とは考へず、自らがその初期の断片以来求めて止まなかつた神の存在証明としての二つの道——ひとつは不主動の動者を論証する外的証明としての五つの道で、彼が『形而上学』13巻で行なつたもので、後にトマス・アクウィナスの踏襲したものである。今ひとつは自己充足的存在としての神を、認識論的・道徳的・存在論的に論証したもので、後にニコマコス倫理学第10巻6章以下で扱つたものである——によつて完成さるべき体系としての神に関する学問を彼は *epistēmē theologikē* すなはち、真の意味の神学であるところのものと呼んだことは前に述べた。これに比べれば、キリスト教の世界で、いはゆる *scientia sacra* 乃至 *theologia* と呼ばれてゐるものの多くは、啓示的情報の秩序化に過ぎず、たかだか解釈はあつても歴史の彼岸に過ぎず、歴史を超えての発明は絶無であると言つても良く、神の系譜乃至は神話に過ぎない。

アウグスティヌスの学問が、ロゴスの自己展開のみではなく、神の所与としてのロゴスと神の所与たる啓示としてのエートスを弁証法的に生かして結び合はせる創造とは言へなくとも、創意に満ちた発明としての神学

であるならば、基本的に自覚された方法論として先程述べた ego 及び scriptura と vos ut homines の三者の発明的対話関係が最も重要であるとしても、この scriptura すなはち聖書の扱い方に何か特定の方法がないならば、折角の inventio も無駄になりはしないか。それに関して、彼は『De doctrina Christiana』の中で極めて明瞭な基本的方法を述べてゐる。すなはち、Sunt praecepta quaedam tractandarum Scripturarum つまり「聖書を扱うために法則がある」と述べて、magnum remedium est linguarum cognitio「言語の知識が究めて大きな方法である」<sup>(20)</sup>と言つて、神学研究についてはヘブライ語とギリシア語の知識が、ラテン語を母国語とする人々にも必須であるとしてゐる。しかし、それは決して既に知られてゐることを伝える面 modus proferendi quae intellecta sunt すなはち神学的情報の伝達だけではなく、modus inveniendi quae intelligenda sunt すなはち、明らかに知るべき事柄を発見して行く側面が大切なものとして考へられるからである。神が無限であるならば、神の教へは無限に深い。modus inveniendi すなはち、発見的な創意に満ちた精神の位相としての哲学的精神を持たない神学、自己の未完成を自覚し、神の秘密に開かれた哲学的精神を持たない神学、それはアウグスティヌスに於いては、神学の死なのであつた。Ne timeas Maria, invenisti enim gratiam apud Deum すなはち、マリアが神の使いたる天使ガブリエルから聴いた言葉は、神の秘密の前に恐れてはならない、汝は神に於いて恵みを発見している、といふ言葉であつた。

神話たる theologia ではなく神学たる theologikē を営むことこそが、哲学と神学を結び合はせて神の創つた世界の論理的必然の探求（アコルテイア）を主張したニュッサのグレーゴリウスや行為的実存の活路を発明（inventio）しようとしたアウグスティヌス、この二人の教父の現代神学に対する警告なのである。神学は、しかし、パイデアで終らず inventio に至らねばならない。ここに394年に死んだグレーゴリウスをも凌ぐ430年に死んだアウグスティヌスの新しさがある。日の下に新しきことな

し、とは真であるが、しかしまた、神が日毎に創造を続けていることも真である。40年の違ひに、尚神学上の進歩があるのであるとすれば、神が用意している真理に向けて、20世紀は13世紀を神学のパイディアとして学ぶにしても、それを越えた *inventio* を怠つて良いものであらうか。

## 註

- 1 『テアエテトス』一七六Bの一
- 2 『パイドーン』八二B八一十
- 3 P. G. XLIV. 429C
- 4 P. G. XLIV. 1145B
- 5 『創世記』三章十九
- 6 『創世記』三章二十一
- 7 テルトウリアヌス、『ヴァレンティヌス駁論』二四
- 8 オリゲネース Res. 1の29
- 9 アリストテレース『気象論』B巻第一章353a35
- 10 アリストテレス『形而上学』E巻第一章1026a19、『形而上学』K巻第七章1064a33, 1064b3. 尚これに関連して *θεολογος*『形而上学』B巻第四章1000a9及び 98a6. 及び *θεολογήσαντες* Ibid. 1000a10, 『形而上学』A巻第三章903b29 (*θεολογεῖν*)
- 11 『マタイ伝』五章十七節
- 12 『マタイ伝』五章四三一四四節
- 13 『恩寵と自由意志について』二十章
- 14 『エペソ書』二章八一九節
- 15 『エペソ書』二章十節
- 16 『神国論』十一巻十七章 (*bitium*)
- 17 『恩寵と自由意志について』第八章二十
- 18 『詩篇』五十の十二
- 19 この聖句は『コリント後書』卷十七—十八
- 20 『キリスト教理論』十一—十六